

COMEVA? 建築の巨匠レンゾ・ピアノ

「世界やヨーロッパでは、トレント市は16世紀におこなわれたトレント公会議でよく知られていますが、これからは、自然、科学、技術を一体にした新概念の博物館であるMUSE (Museo delle Scienze 科学博物館) でも知られるようになることを望みます。博物館は、建築設計や所在地の視点から、そして都市工学の大きな変革期を象徴するものとして、トレントのアイコンのシンボルの一つとなることでしょう。閉鎖になったミシュラン社のタイヤ工場跡という問題のエリアを、一つの好機会と捉えること、それが、私が立ち向かった挑戦でした。それは、公共と民間の団体による発注をもとに、MUSEだけを設計するのではなく、アルベレ館、Via Monte Baldo、鉄道、アディジェ左岸までの11ヘクタールのエリアに新しい住宅街地区を設計するというものでした。この事業の目的は、トレント市に、旧市街とアディジェ川にはさまれたエリアの再整備をおこなうことで、アディジェ川の流れを甦らせることでした。」と、建築家のレンゾ・ピアノは語り、次のように続ける。「一つのプロジェクトが完了することは、建築家にとっては非常に感動的なイベントです。そして、その瞬間から、プロジェクトはもう建築家の手から離れるのです。私たちはトレントで10年間作業しましたが、この10年間は意義あるものでした。ここでは人々の団結があり、やる気があるからです。私たちは、科学博物館の建設と周囲エリアの再整備を予定時間を守りつつ、予算内で実現することができました。奇跡と言えます。しかし、これでプロジェクトが終わったわけではありません。今年には、さまざまに利用に向けて、宅地を市に公式に渡すことになっています。真のトレントの挑戦は今から始まるのです。」



レンゾ・ピアノ

レンゾ・ピアノとイタリア・トレント市にあるMUSE



「一つのプロジェクトが完了することは、建築家にとっては非常に感動的なイベントです。そして、その瞬間から、プロジェクトはもう建築家の手から離れるのです。私たちはトレントで10年間作業しましたが、この10年間は意義あるものでした。ここでは人々の団結があり、やる気があるからです。私たちは、科学博物館の建設と周囲エリアの再整備を予定時間を守りつつ、予算内で実現することができました。奇跡と言えます。しかし、これでプロジェクトが終わったわけではありません。今年には、さまざまに利用に向けて、宅地を市に公式に渡すことになっています。真のトレントの挑戦は今から始まるのです。」

レンゾ・ピアノの世界への挑戦は、1960年代に始まった。1937年にジェノバの建設会社の家系に生まれ、1964年にミラノ工科大学を卒業した。続いて、マルコ・ザヌーゾに師事した。ミラノでは、フランコ・アルビーニの建築事務所にも出入りした。1965年から1970年にかけて、レンゾ・ピアノは、イタリアで初期の実験的な仕事をしながら、アメリカ合衆国、イギリスで留学を重ねる。彼の最初の国際的プロジェク

トは、日本で1970年に開催された大阪万博でのイタリア工業館のプロジェクトで1969年のものだ。同時期には、ジャン・ブルヴェエやリチャード・ロジャースなど、さまざまな設計を手がけていた建築家たちとも交流する。そして、ロジャースとロンドンに「ピアノ&ロジャース事務所」を開く。この事務所は、1971年にパリの「ジョルジュ・ポンピドゥー」センターの設計に向けた国際競技で選ばれるという快挙を成し遂げた。この建物は、ハイテク建築の世界的な原型と考えられ、現在、パリでも屈指の見学者数を誇る美術館となっている。レンゾ・ピアノはパリに魅せられ、家族とともに移り住む。そして、リチャード・ロジャースとの仕事上の関係が破綻した後は、エンジニアのピーター・ライスと仕事をはじめ、1977年から1981年にかけて「ピアノ&ライス事務所」として活動した。



ニューヨーク・タイムズ社の新しい本社ビル、ニューヨーク・タイムズ・タワー

しかし、レンゾ・ピアノの変革の都市は1981年である。この年、Renzo Piano Building Workshop (R.P.B.W.) という、建築と工業の分野を統合する事務所を、パリのみならず、ジェノバ、ニューヨークにも設立した。およそ150名に及ぶスタッフとともに、同事務所は数々の「アイデア競争」に当選し、世界中で未来派的なプロジェクトを実現した。その主なものは、アメリカ・ヒューストンのメニル・コレクション、スイス・バーゼルのバイエラー財団美術館、ニューカレドニアのジャン・マリー＝チバウ文化センター、ドイツ・ベルリンのポツダム広場、ローマのオーディトリウム音楽公園、アメリカ・ダラスのナツシャー彫刻センター、アメリカ・アトランタのハイ美術館新館、アメリカ・ニューヨークのモルガン・ライブラリー増改築、アメリカ・カリフォルニアのカリフォルニア科学アカデミー、ロンシャン史跡の再整備、アメリカ・ボストンのシカゴ美術館増改築およびイザベラ・スチュワート・ガードナー美術館が。R.P.B.W.はユネスコとも共同作業をし、ジェノバの旧市街整理や、ギリシャのクレタ島のハニアにある古い造船所や古代ローアの堀の修築を手がけた。日本だけでも、R.P.B.W.は関西国際空港旅客ターミナルビルや、熊本県の牛深ハイヤ大橋、東京のメゾン・エルメスを手がけている。



イギリスのシャード・ロンドン・ブリッジ

このようにレンゾ・ピアノの作品は全大陸に跨り、建築家としての弛まない活動を称える賞を多く受賞している。中でも、ロンドンでの王立英国建築家協会 RIBA ゴールドメダル (1989)、東京での高松宮殿下記念世界文化賞建築部門 (1995)、ワシントンでのプリツカー賞 (1988)、アメリカ建築家協会 AIA ゴールドメダル (2008) は由緒ある賞となっている。また、欧米の大学での名誉博士号を多く受賞しているほか、ユネスコ親善大使にも指名されている。

レンゾ・ピアノは、国際的に重要な建築家の一人として知られている一方で、若い世代にこの職業を引き継がせることも忘れてはいない。2004年にはレンゾ・ピアノ財団を設立した。これは、レンゾ・ピアノ事務所のアーカイブの保管や利用、ジェノバとパリにおけるR.P.B.W.事務所における若い建築家の養成、奨学金事業、書籍出版、展示会の推進など、多方面の活動を行う非営利団体である。

今や、75歳になったレンゾ・ピアノの活動は、特に美術館・博物館の設計や修築が中心となっている。中でも、マサチューセッツ州ケンブリッジのフォッグ美術館の再整備・増築、ニューヨークのホイットニー美術館やコロンビア大学のキャンパス、フォートワースのキンベル美術館の増築、アテネのスタプロス・ニアルコス財団文化センター、スペイン・サンタンデルのポティン芸術センターが重要なものです。



東京のメゾン・エルメスの中

このような選択をする理由を建築家に尋ねるとこのような答えが返ってきました。「卓越したもの、文化を私たちは必要としています。閉ざされた文化サークル的なものに私は興味を持っていません。生きた芸術というものは、共有するものです。もちろん、人間がまず必要とするものも忘れてはいけませんが、芸術というものはそれを見る人々の目に不思議な光を与え、人々を向上させるものなのです。私の設計してきた美術館が町を向上させることを祈っています。」

GianAngelo Pistoia
ジャンアンジェロ・ピストイア
 Concept & design: GianAngelo Pistoia
 Photos: Archivio P.A.T. - トレント市 - Michel Denancé - Kawatetsu - Nikolas Ventourakis - GianAngelo Pistoia/A.P.

日本の関西空港ターミナル